

平成 24 年 3 月 30 日  
「多文化共生推進士」養成ユニット評価委員会

「多文化共生推進士」養成ユニット評価委員会における  
平成 23 年度の本事業の取組についての評価結果

評価の概要

【評価結果】

大変順調に進んでいる。

【判断理由】

平成 23 年度の事業については、第 1 回評価委員会（平成 23 年 5 月 16 日開催）でのアドバイスを真摯に受け止め、迅速かつ具体的に対応しており、以下の理由から、本事業全体として大変順調に進んでいると判断した。

①事業の進捗状況

多文化地域で活躍する実務経験者を積極的に活用している。

- ・実務家教員を招きチーム指導を導入した。
- ・講義等でも実務担当者の経験から学ぶ機会を増やした。
- ・各コースの成果発表会に地域協働ネットワーク会議委員を招き、指導・助言を受けた。

②事業の教育内容及び実施方法

東日本大震災の対応など、社会的関心が高く地域活動支援に早期につながる取組を積極的に展開している。

- ・東日本大震災への防災と被災者支援で主導的な役割を果たしている 2 名の有識者を講師として招き、その知見に学ぶ機会を提供している。
- ・地域防災の取組を実現するためのプランを、プランナー・コースの履修生がみなかみ町国際交流協会との連携で立案した。そのプランが、群馬県の「地域づくり協働モデル事業」に採択され、履修生有志が課外活動として参画する予定となっている。

③事業の実施体制及び地域との連携状況

企業との連携を深める努力をしている。

- ・前橋商工会議所の協力で、「第 7 回群馬県産学官連携推進会議」でブースを設けて、本事業を紹介した。

④事業の有用性及び発展性

地域一般や企業への PR・啓発活動をすすめ、「多文化共生推進士」に対する社会的

認知・支持を積極的に高める工夫をしている。

- ・公開講座やシンポジウムの案内を大学のホームページに掲載、報道機関への広報を行った。
- ・群馬県庁内のサイネージ広告やラジオ放送等を活用して周知している。
- ・新聞等でも事業の様子が度々紹介されている。

#### ⑤その他

日本語を母語としない外国人応募者への選考や定期試験等に、必要十分な配慮をしている。

- ・選考試験や定期試験において、本人の申し出に基づき、対訳辞書の持ち込み、試験問題の漢字のルビ表記、試験時間の延長等、特別措置が提供されている。

今後は、科学技術振興機構による中間評価を踏まえ、多文化共生推進士の活躍の場を具体的に検討すると同時に、地域で多文化共生の機運が高まるような、いわば「山の裾野を広げる」取組にも期待する。

なお、委員会では、以下のような助言をした。

#### ①企業との連携をさらに強化してはどうか。

- ・群馬県産学官連携推進会議において、今回は「展示」で参加した。今後はさらに一歩踏み出して、講演や懇談会などを行ってはどうか。
- ・企業にとっては、グローバル化し国外に出ることが潮流。しかし、国内の身近に多文化コミュニティがあることを認知し、その資源を活かすことは、企業にとってメリットがあるはず。このメリットをアピールして協力を求めるとよい。
- ・「多文化共生推進士」養成ユニットで学んだことは、ビジネスの中で直接的ではなくとも波及効果的に活かすことができる。例えば多文化社会の中で、売買しやすい環境をつくることは、売り手にとっても買い手にとってもメリットがある。この点を企業にアピールしてはどうか。

#### ②「多文化共生推進士」を育成する中で、地域で多文化共生の機運が高まるような、いわば「山の裾野を広げる」取組によりいっそう力を入れてはどうか。

- ・企業には、海外赴任経験者も多く、退職して時間に余裕のある人や、語学に堪能な人もいる。こうした人々の活用は効果が期待できるのではないか。
- ・メディアをうまく活用し、地域の隅々まで「多文化共生推進士」を周知していくことも重要である。
- ・「安全安心のまちづくり」というキーワードで、地域の活性化、住みよいまちづくりへの取組につなげることが可能である。その意味で、本事業において、群馬県警察本部やロサンゼルス市警察本部と連携していることは評価できる。
- ・地域の関心を高めるため、シニア世代の人にも多文化共生に関する初歩的な内容を学習できるような機会を設けてはどうか。

以上